

# 日本シェリー研究センター

## 第 25 回大会

日時 : 平成 28 年 (2016 年)12 月 3 日 (土) 12 時 40 分受付  
場所 : 東京大学 本郷キャンパス 山上会館 2 階 大会議室

### 1816 年夏ディオダーティ荘——

#### 『フランケンシュタイン』誕生二百周年記念

#### 特別プログラム

1. 13:00 開会の辞 会長 阿部 美春

2. 13:05 特別講演 I 滋賀医科大学 相浦 玲子

#### ディオダーティ荘における恐怖小説饗宴をめぐる

3. 14:05 特別講演 II 九州大学 阿尾 安泰

#### ルソーからみた『フランケンシュタイン』

(15:05~15:30 休憩)

4. 15:30 シンポジウム

#### 1816年夏ジュネーヴ湖畔における

#### シェリー・バイロン・サークルの文学的交流

Symposium to Commemorate the 200<sup>th</sup> Anniversary  
of the birth of *Frankenstein*

司 会

パネリスト I

パネリスト II

阿部 美春

阿尾 安泰

相浦 玲子

5. 16:30 年次総会

昨年度分会計報告・その他

#### ～懇親会～

17:30 より山上会館地下 1 階会議室 001 にて開催いたします。  
是非ご参加ください(会費 4,000 円)。

事務局からのご連絡

\*今年度分 (2016 年)の会費未納の方は受付にてお支払いください。

\*会場使用料の一部負担金として、参加者お一人 500 円を頂戴いたします。

第 25 回大会プログラム

## 特別講演 I

### ディオダーティ荘における恐怖小説饗宴をめぐる

相浦 玲子

今からちょうど 200 年前の 1816 年夏に、スイスのディオダーティ荘というレマン湖畔の別荘に数人の男女が集った。しかし、その集いのメンバーは当時のごく平均的な若者ではなく、さまざまな内面を持つ人々で、彼らの織りなす関係・非関係はこの場限りに終わらない多くのものを後世に残した。その最たるものはメアリ・シェリーの『フランケンシュタイン』であろう。

その年は、“the year without a Summer”と呼ばれるように、世界的に見ても異常な気象の年であった。前年 1815 年 4 月のインドネシアのタンボロ火山の噴火によって、北半球全体が薄暗くなり、嵐や雷も多く雨の多い気象をまねいていた。現代の我々は、大きな自然災害の時に思い起こす以外は、真の闇に触れることはあまりあるまい。また室内に閉じ込められる不自由さは、多くの人にとってテレビ、コンピューター・ゲームなどで簡単に解消できるようになっている。しかし、1816 年にはそれらは何も存在していなかったために、若者にとって娯楽が存在するとすれば、「語ること」が中心になったであろう。あるいはろうそくの灯りの元に誰かが朗読するというくらいしかなかったと思われる。このような状況は、普段の夏なら戸外で自然を楽しむこともできる時間帯をも暗くして、館の周りにあまり人がいない寂しい環境の中、人の心に微妙に影をさしたのではないだろうか。また、いにしえから文学の原型の一つである「語り部」の伝統を彷彿とさせる状況が生み出されたのではないだろうか。

スキヤンダルにまみれたバイロンはこの年、前年に結婚したばかりの妻と別居して 4 月に自己追放するかのよう英国を去って大陸に向かった。一方、シェリーは妻ハリエットを置いて、駆け落ちしたメアリ・ゴドウィンと大陸に向かった。バイロンは年若い従医のポリドリを伴い、シェリー「夫妻」は、メアリの義理の姉妹、クレア・クレアモントを伴っていた。この二つのグループはスイスで合流し、最初はホテルに滞在する。当時、ホテルに宿をとるには詳細な身元を書くことが要求されていて、このような権威主義的な強制を嫌うシェリーとバイロンは、反発して思い思いの嘘を記入した。バイロンは、セシュロンのおテル・ダングルテールにて宿帳に年齢を「100 歳」と記入し、シェリーはその後シャムニで、「民主主義者、人類愛者、無神論者、目的地は地獄」などと書き込んだ。バイロン一行は悪路で到着が遅れていたが、クレアは既に関係のできていた恋人バイロンに会いたくて一日千秋の思いでその到着を待っていた。宿屋の記帳でその名と 100 歳の年齢を見つけて、「... あなたはあまりにゆっくりなので 200 歳かと思いましたよ」などと書いた。しかし、バイロンは既にクレアに対して冷淡で、シェリーとバイロンは高邁な議論に夢中で、どちらかというともまだ 18 歳に過ぎないメアリはポリドリと取り残されることも多く、メアリはシェリーを独り占めにするバイロンに嫉妬し、クレアはバイロンと近い関係にあるポリドリに嫉妬するというような複雑な人間模様がそこにはあった。

このような中で、毎夜、皆が集まると文学談義などが始まった。ある夜、コールリッジの『クリスタベル』をバイロンが朗読してシェリーが恐怖に満たされて叫んで部屋をでた、という逸話もある。ここに集っていたうら若き女性たちにとっても恐怖の体験であったことは想像に難くない。ドイツの

恐怖小説『ファンタスマゴリアーナ』を読んでヒントを得たバイロンの発案で、一人一人が恐怖のストーリーを作るということに一同が賛成したのであった。

(あいうら・れいこ 滋賀医科大学)

## 特別講演 II

### ルソーからみた『フランケンシュタイン』

阿尾 安泰

ルソーとロマン主義との関係を考えるとき、その親和性は誰の目にも明らかに思える。ルソーはロマン主義の父のような位置づけである。ただそれは主として、ロマン主義の側からルソーを見た場合ではないだろうか。もしルソーがこの 19 世紀に生まれる文学グループの中に現れたとしたら、まわりから投げかけられる称賛にたいして、当惑することも少なくないのではないだろうか。

我々がルソーをロマン主義の先達として捉えて満足できるのも、そこに 18 世紀から 19 世紀にかけての連続的な文学的潮流を想定しているからである。ルソーがこのロマン主義という流れを準備したというわけである。実際こうしたらえ方は説得力があり、また多くの光明を与えていることも否定できない。ただこの見方で全てを考えようとすると、一つの陥穽に陥ることになりはしないだろうか。連続性の神話である。確かに 18 世紀は続く世紀を準備した面もあるが、それだけではない。後の時代と断絶した面もあるはずである。ところが、そうした視点が連続性を強調する中で、抜け落ちてしまうのである。18 世紀の独自性を確保する必要があるだろう。我々としては、ルソーとロマン主義との類縁性を認めた上で、その差異にも注目すべきであろう。たとえば、キーワードとなっている「自然」、「内面」などの語も両者が用いる微妙な違いに注目していくべきであろう。

また 18 世紀という概念にも注意が必要である。たとえば、ルソーの作品について、18 世紀フランス文学に属するものという位置づけが与えられることもある。それは、彼の作品がヴォルテールなどの作品と同じ地平を共有することだろうか。それでは、ルソーの独自性を見失うことになろう。ここにもう一つの陥穽が現れる。統一性の神話である。フランス語を用いながらも、ルソーほど自らの出自たるジュネーヴにこだわり、パリを中心とするフランス文化圏にたいする距離感を強調した作家はいないのである。文化の多様性を絶えず意識してきたのがルソーである。18 世紀の言語文化空間がこうした多層性の中から自らの活力を引き出してきたことを忘れてはならないだろう。

こうして、統一性、連続性などを問い返すことで何が見えてくるのかというのが今回の主題である。具体的には、シェリーの記念碑的な作品である『フランケンシュタイン』を突破口として取り上げる。そのテキストが前の時代からの語りの枠組みである書簡等を使いながらも、いかにそれを新たな形に組み上げていくのかを考えてみたい。さらにこの作品において重要な意味を持つ、「生命」、「科学」、「家族」などの概念が 19 世紀以降に孕む新たな意味を検討する。そうした語りが切り開く新たな地平を、それ以前の状態と比較することで、どのような展開が以後生まれていくのかを明らかにしてみたい。

(あお・やすよし 九州大学)

## シンポジウム

### 1816年夏ジュネーヴ湖畔における シェリー・バイロン・サークルの文学的交流 Symposium to Commemorate the 200<sup>th</sup> Anniversary of the birth of *Frankenstein*

司会 阿部 美春

2016年は、『フランケンシュタイン』が誕生してから二百年を迎える年である。そこで今年のシンポジウムは、二百周年記念企画として、作品誕生の原点にたちかえり、1816年夏、ジュネーヴ湖畔でのシェリー・バイロン・サークルの文学的交流と、彼らが信奉したジュネーヴ出身の思想家ルソーに焦点をあてる。

1816年夏、湖畔のディオダーティ荘に集った若者たちの交流から、『フランケンシュタイン』が誕生したことは、英文学史のよく知られたエピソードである。前年4月のインドネシア、タンボラ山噴火の影響で史上まれに見る低温・多雨の夏、彼らは退屈しのぎにドイツの恐怖小説をフランス語訳で楽しみ、バイロンの提案で幽霊譚競作に興じた。館を訪れたバイロンの友人「マンク」ルイスも、怪奇譚の語り部となった。彼らの私生活あるいは作品ゆえに、この交流は専ら醜聞として語られ、ラッセルの『ゴシック』(1986)やスアレスの『幻の城』(1988)等の映像によってそのイメージが定着した感がある。確かに、ディオダーティ荘に集ったシェリー・バイロン・サークルは、ジュネーヴに滞在するイギリス人避暑客の好奇的だったが、この交流からは、スキャンダルだけでなく、文学も豊かに生み出された。

従来、文学的交流の焦点は、イギリス・ロマン派メジャー詩人シェリーとバイロンに集中し、そこに20世紀後半以降メアリアが加わった。シンポジウムでは周辺的存在として等閑視されてきたポドリと、交流のもう一つの成果『ヴァンパイア』を含めた恐怖小説の饗宴をめぐる、また、この年、詩人たちが縁の地を詣でたルソーの影響について、専門家を招聘して新たな知見を得る。

当時、ジュネーヴは、陰鬱な気候のイギリスを逃れる避暑地として人気が高かったのだが、故国のスキャンダルと同国人の目を逃れたいはずの両詩人が、敢えてその地を選んだ理由のひとつは、ルソーと『新エロイズ』の聖地詣にあったことは想像に難くない。メアリアは、詩人たちの聖地詣に同行してはいないが、啓蒙思想を信奉するフランケンシュタイン一家をジュネーヴ共和国市民とし、死の床につくフランケンシュタインの母親を、子どもを救うために我が身を犠牲にし、毅然と死を受け入れる母性愛の鑑として、ジュリを彷彿させる姿で描いた。

シンポジウムでは、相浦玲子氏と阿尾安泰氏の特別講演をふまえ、「1816年夏ジュネーヴ湖畔におけるシェリー・バイロン・サークルの文学的交流」というテーマのもと、フロアと意見交換をしていく。センターでは、これまでシェリー研究者からみた『フランケンシュタイン』として、シンポジウムを組んできたが、今年は、バイロンの専門家、相浦玲子氏ならびにヨーロッパ文学思想の専門家、阿尾安泰氏にパネリストとしてご参加いただき、『フランケンシュタイン』をはじめロマン派第二世代の文学運動の新たな眺望を得ることをめざしたい。

(あべ・みはる 立命館大学)